

専門研究B

発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に 関する研究

一二次障害の予防的対応を考えるために一

(平成22年度～23年度)

研究成果報告書

平成24年3月



独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

はじめに

発達障害のある子どもは、学習面や行動面、対人関係、コミュニケーションなどに困難を抱えている。しかし、そうした障害特性が必ずしも学校や集団において不適応の状態を引き起こすとは限らない。適切な支援は適応状態の改善などの教育的効果を生み、家族や教師、友達との人間関係や安心できる生活空間が保障されていることなど、適切な環境により適応状態は安定していく。

例えば、LDのある子どもは、学習面の不全感から学級における活動への参加意欲の低下が見られ、自閉症のある子どもは、対人関係の希薄さや疎通性の悪さ、固執性による切り替えの悪さから活動場面を避けることがある。また、ADHDのある子どもの場合は、不注意や多動・衝動性から周囲との協調性を欠く行動につながることもある。集団生活を営む上で、学級の中で一緒に活動することの難しさや協調性を欠く行動は、しばしば周りから否定的な反応を引き出してしまう。度重なる失敗経験や周りからの注意や叱責は、発達障害のある子どもに不安感を高め、さらなる自信や意欲の低下を導きやすい。また、情緒的に不安定な状態は、様々な精神症状を引き起こす場合もある。

発達障害のある子どもが本来抱えている様々な障害特性を一次障害と捉えたと、環境やかかわりに起因する適応困難の状態は二次障害と捉えられる。特に学校現場では、発達障害のある子どもはアンバランスさに気づかれにくく、行動問題や不登校等の二次障害が起きてしまった後で、対症療法的な対応がされがちである。二次障害は、子どもが安心して生活することができる環境へと改善を図ることで、比較的短時間で改善する可能性もある。自己肯定感や自尊感情が高まる支援を工夫するとともに、二次障害を生起させないような予防的対応を常に意識しておくことが重要である。

本報告書は、発達障害の二次障害についての現状と課題を把握することから、その予防的対応について考察することを目的とした研究についてまとめたものである。本研究における二次障害を予防する視点、さらに状態を悪化させないための視点が、少しでも現場の対応への参考になれば幸いである。

2012年3月

研究代表者 企画部総括研究員 笹森 洋樹

目 次

はじめに	1
I 問題と背景	3
II 目的	4
III 方法	4
IV 研究内容	5
1. 本研究における「二次障害」「情緒障害」の概念の整理	5
(1) 発達障害の「二次障害」について	
(2) 情緒障害について	
2. 発達障害の二次障害、情緒障害に関する先行研究・文献・調査資料等から	19
(1) 個人の問題と環境との相互作用について	
(2) 発達障害と不登校、ひきこもり	
(3) 行動問題と生徒指導の視点から	
(4) 特別支援学校(病弱)及び情緒障害児短期治療施設における発達障害	
3. 調査研究	26
<調査1> 自閉症・情緒障害特別支援学級における実態調査	
<調査2> 発達障害のある子どもの保護者アンケート調査	
<調査3> 情緒障害児短期治療施設及び施設の子どもが通う学校への訪問調査	
V 研究協力者から	70
1. 発達障害の二次障害に対する予防とは何か	
国立国際医療研究センター国府台病院 齊藤万比古	
2. 発達障害の二次障害を予防するために	
－情緒障害児短期治療施設の実践から考える－	
社会福祉法人横浜博萌会 横浜いずみ学園 施設長 高田 治	
3. 「二次障害」を考える ～困難さと対応～	
東京都田無市立第二中学校情緒障害通級指導学級担当教諭 渡辺圭太郎	
VI 総合考察	83
文献	
研究体制	